

がん治療の今

13

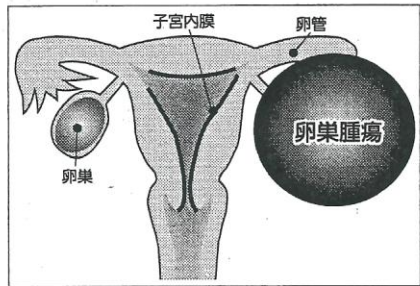
年間6千人り患

女性特有のがんの一つに、「卵巣がん」があります。文字通り、卵巣か

遺伝子であるBRCA1遺伝子やBRCA2遺伝子などの遺伝子変異が注目されています。

子宮がんでは、不正出

卵巣がん編



年1回の定期的な検診だけでは、発見が遅れる。子宮と卵巣の位置」と「卵巣腫瘍」のイメージ図―出典・日本産婦人科学会ホームページ(図の一部は加工しています)

「子宮と卵巣の位置」と「卵巣腫瘍」のイメージ図―出典・日本産婦人科学会ホームページ(図の一部は加工しています)

通院で化学療法

卵巣がんは若年女性に発症することもあり、その場合は、妊娠する力(妊孕性)を温存するため、患側卵巣のみを摘出する場合もありますが、慎重な判断が必要となります。

分野において、妊孕性温存とがん治療は、重要なテーマになってきています。

卵巣がんに対しては手術療法が第一選択となりますが、術後に化学療法(抗がん剤)が必要になることも多々あります。抗がん剤に対する副作用対策を早期から積極的に行うことで、婦人科ではほぼ通院で化学療法を行っています。

卵巣がんでは、適応とならないこともあります。血液疾患や他のがんが、将来的な妊孕性に悪影響を及ぼす化学療法が必要な若年患者に対しては、妊孕性温存のための卵巣凍結などの治療が、大学病院を中心に行われてきています。産婦人科

治療方法の選択肢拡大

ら発生する悪性腫瘍で、年間約6千人がり患し、約4500人が亡くなっています。

卵巣がんの発生には、複数の要因が関与しているといわれています。

最近では、遺伝性乳がん・卵巣がん症候群の原因

血などの症状が出るのに対して、卵巣がんは自覚症状が出ないまま、「最近おなかが出てきた気がする…」などと訴えて受診する患者もいます。この時には卵巣が、かなりの大きさに腫れていることも、しばしば経験します。

こともあるため、下腹部の違和感などの症状を気に掛け、適時、受診することが早期発見にもつながります。

卵巣がんに対しては、手術療法が第一選択となります。卵巣がんの標準的な手術として、両側付

この場合、術中に迅速な病理検査を行い、良性、悪性、その中間の境界悪性の診断をつけます。それによって、手術の際にリンパ節郭清をすることも

みなみ・ひいな 2004年(平成16年)札幌医大卒。産婦人科専門医。母体保護法指定医。42歳。

製鉄記念室蘭病院 南妃奈産婦人科長